
恋する王子様。

しろ猫。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する王子様。

【Nコード】

N6547F

【作者名】

しろ猫。

【あらすじ】

好きな人が出来ない主人公、瑛斗。陰で「王子」と呼ばれ、告白される毎日。女が苦手な彼はある日、一目惚れをする。初恋男の不器用な恋物語。ほのぼの系？ラブコメ

さあ、退治だ。

はじめてだった。

胸が苦しくなった。

守りたいって思えた。

「好きです！付き合ってください！」

目の前には顔を赤くした女。

上目遣いで、今にも泣きそうだ。

んー・・・確かこいつは、

イジメのリーダーだっけ。

いや、隊長？・・・同じか。

女子って裏で色々あるみたいだけど

結構男から見てもわかるんだよなあ。

プツと吹き出しそうになる。

やべ。

女は不安げに見つめる。

「あのー・・・？」

もじもじして髪を触っている。

なんだ？可愛いつもりか？

「返事は・・・？」

不安げな態度とは裏腹に、勝ち誇った顔。

俺が嬉しさのあまり動けないとでも？

心の中で大きな溜息。

「無理。」

ヒュー・・・

いい感じのタイミングで風がふいた。

どこからか、チャララーン♪と、

悲しい音が聞こえてきそうだ。

俺はまた吹き出しそうになる。

女は赤くなってた顔を更に赤くした。

これは・・・怒りか？

「な、何が無理なわけ？」

堪えているのだろうか？

ワナワナと震えている。

理由聞いちゃうんだ。

「うーん・・・全部？」

聞いてどうする俺。

それにさっきのような風はなかった。

心の中で舌打ち。

「は・・・はあ？あんだ・・・ふざけないでよ！」

女は鬼のような顔でキレる。

赤鬼さんやないか（笑）

とうとう堪えきれずに吹き出してしまった。

「あんたが！あたしのこと見てたから！」

ん？赤鬼が何か言ってるぞ。

「好きだから見てたんでしょうが！」

ぜえぜえしてる。

なんかね、もうね・・・怖い。

見てたっけ？

無意識に見てたならそれはきつと・・・

「怖いなあと思って・・・」

女は俺の言葉に赤鬼から青鬼に変身した。

「……………っ!!」

言葉にならない言葉を発して去っていった。

「あれ？終わり？」

鬼退治終了。

犬でもキジでもない。

「おい、瑛斗っ」

誰かが俺の名前を呼んだ。

振り返ると予想通りの奴。

「おう、やっぱレオか」

「なんだよ、やっぱって」

「気にすんなって」

軽く殴れた。

「お前また告られてたじゃん」

「ん？・・・ああ、赤鬼さん？」

「は？赤鬼？」

「あ、途中で青鬼・・・クッ」

ああ、思い出し笑い。

「意味わかんねーよ」

ウケてる俺を見てウケるレオ。

「だったからっ、ブハッ、顔がつ、クッ・・・」

「説明になってねーよ」

ちよつと引かれた。

落ち着いた俺は全部を説明した。

「はいはい、そういうことか」

納得したレオは涙目をこする。

「つか・・・見てたなら助けろ」

ポカッ^ぽと殴る。

「いてっ、邪魔しちゃ悪いじゃん」

いやいやあんた・・・

親友が鬼に襲われてるんよ？

言おうとしたけど、やめた。

照れくさい。

「こんだけ告られてて良い子いなかったのか？」

レオの言葉にハッとした。

「良い子はいらるうけど・・・」

よく知らないし。

そんな俺にレオは軽く溜息をついた。

「お前な・・・、最初から両想いなんて普通ないぜ？」

まず付き合ってみれば良いじゃん」

「・・・そういうもんか？」

とりあえず連絡先聞いて俺に教えるよ、と

言った彼に俺のアップーが炸裂した。

不思議。謎。

平凡な毎日。

俺にはスリルが足りない。

「ま、いいや」

廊下を歩くと後輩やらが騒いでいる。

うお、なんかぶつかってきた・・・

え、あ・・・何これ、紙・・・アドレス？

トイレに行くまでの数秒間で色々収穫。

いつもながら怖い。

トイレの個室に入って物色。

ピンクの便箋にノートの切れ端。

油断させといて・・・呪いの手紙とか？

こんなスリル悪くない。

結構チキンの俺。

「んーと、す……すきで……す、愛して……ます」

字が丸い。読みにくい。そして重い。

これは一種の呪いだな。

「メール待ってます、か……」

アドレスが書かれた紙。

前に似たような紙を渡されてメールしなかった。
泣きながら「待ってたのに！」というあの顔が
今でも頭から離れない……女って怖い……

チャイムが鳴って、慌てて教室へ戻った。

「あ、トイレすんの忘れた」

「あー、彼女ほしー」

放課後、レオが呟いた。

「・・・そうだな」

怖くない彼女がほしい。

「お前が彼女いないなんて不思議だよな」

その言葉が不思議です。

恋すらししたことないなんて、俺おかしいのかな？

ださいのかな？どうすれば出来る？

レオは小学校の時から友達で、部活とかも一緒だった。

中学の時にこいつに彼女が出来て、俺も続こうと思った。

高校に入っても女を好きになったことなんかなくて、
逆に怖くなっていく気がする。

そろそろホ。だと思われそうだぜ・・・

「ま、お前は火がつくと消えなさそうだしな」

謎の言葉を残して、先に歩き出すレオ。

「火・・・か」

朝は嵐です。

「んあー」

寒い寒い・・・

朝は嫌いだ。

ヴヴヴヴヴヴ

「ぎょわっ」

俺は奇声を発した。

携帯か。

ああ、また・・・

開くと何件ものメール。

「なになに？ 斉藤くんから聞きました　メル友になって♪・・・は
？」

くそ・・・斉藤め・・・

つか、誰だよ怖えよ。

「次は・・・もう付き合って！まじで！ねえ！お願い！・・・ギ・・・ギ・・・」

ギヤー！と叫ぶと同時に家のチャイムが鳴る。

俺の叫びは負けた。

「瑛ちゃん、レオくん来てるよ、はやく準備しなさい！」

な・・・！瑛ちゃんって呼ぶなとあれほど・・・！

母さんの後ろには笑いを堪えてる奴が一匹。

「瑛ちゃん」

「……うぜえ」

「ねえ瑛ちゃん」

「……殺すぞ」

寒いから余計にイラつくぜ。

ドンッ

いって・・・なんだよ。

「キャー、ごめんなさい！」

群れた女たちが騒ぐ。頭が痛い。

「ん、別に」

適当に流す。

「キャッ、また許してくれたー♪」

また・・・だと？

女たちはどこかへ消えていった。

「やれやれだな、前と同じ子じゃん」

レオが呆れた様に言った。

「くそ・・・わざとかよ」

「今頃気づくな（笑）」

教室に着くなり、俺は斉藤にヒザ蹴りをくらわせた。

ちょっとスツキリ瑛ちゃんです。

ピンクレンジャー！

休み時間は地獄だ。

「瑛斗、1年の子達が呼んでるよ」

「え？あ、うん」

「瑛斗、この手紙お前にだつてさ」

「え？あ、うん」

「瑛斗、お前のアドレス。。。に教えていい？」

「え？あ、う・・・ダメ」

だ――！

・・・疲れる。

「おいおい大丈夫かー？」

「レオ君・・・助けなさい」

「まったく、贅沢王子だな」

レオはある提案をした。

「お前が彼女つくればいいんだよ」

俺は溜息。

「お前・・・簡単に言うなボケ」

・・・あ、舌打ちされた。

んなことわかってんだよ。

出来ないから困ってたんだよー！

「瑛斗せんぱい♪手紙読んでくれましたあ？」

・・・。

いきなり登場。

ピンクピンクした集団。

5人ぐらいで・・・レンジャー？

「なんでメールくれないんですかあ？」

何のことだ・・・

まず誰だ君は・・・

一緒にいるピンク達が小声で応援してる。うぜえ。

「マミ待ってたんですよ・・・ずっと」

マミ？知りません。

そしてここは教室のド真ん中です。

邪魔してはいけないオーラが教室をまとう。

「マミのこと嫌いになっ たんですかあ？」

まず知らねえ！

うるうるさせた目で見つめられる。

ちょっと待て。俺が悪いみたいじゃねーか。

・・・。

「ちょっと来て」

俺はマミとやらを引っ張って屋上へ。

廊下でザワつく奴はシカトだ。

――

「瑛斗せんぱい・・・」

目がキラキラしている。

ラメでも入ってんのか？

「ヌ／＼嬉しい・・・」

ああ、勘違い。

俺は今きつと遠い目をしているだろう。

「・・・勘違い」

あ、出ちゃった。

マミとやらはパツと顔を輝かせた。

「勘違いじゃありません！マミも好きでした！」

なんですか？

なんなんですか？

「も」って・・・

「俺、好きじゃないんだけど」

ピンクレンジャーのリーダー・マミの表情が変わった！

あ、なんか赤鬼さん思い出した。

元気かな・・・

青鬼さんもいるかな・・・

「せんぱいつ！：！：！」

やばい、自分の世界に入ってしまった。

「・・・何？」

イライラするなあ。

「こんなに好きなんですよ！」

「俺は無理」

「・・・っ！」

ひるんだ！

押してやるぜリーダーさんよ！

「大体やり方が嫌だ」

マミが凶暴化しそうだ。

しかし俺は続けた。

「皆の前であればちょっと・・・空気読んではよ」

「な・・・?!」

おや？マミの様子が・・・

俺はポケ。ンの進化映像を思い出した。

「ひどい・・・先輩そんな人だったなんて」

みるみる顔が赤くなる。

「もう戻っていい？」

聞いてみた。

「勝手にしてくださいっ」

「ん、どうも」

ああ、すがすがしい。

俺は屋上を後にした。

――

「ギャオー！ちょーむかつく！」

立派な鳴き声と、ガンツという音がした。

・
・
・
。

「おめでとう！マミは凶暴戦隊ギョオレンジャーに進化した！」

ま、こんな感じっすか。

いや、センスねえな。

これぞ魔性の女。

あれから教室に戻る時に、色々な声が聞こえた。

「あ、瑛斗さんだけ戻ってきた」

「ねえ、さっきの彼女かな？」

「ただ告白されてただけじゃない？」

「まじショックう・・・」

「マミみたいな子が好きなのかなあ」

ガラッ

「お、瑛斗無事かー？」

レオが近づいてきた。

ニヤニヤしやがって。

「ああ、無事。進化もさせたよ」

「？」という顔をされた。まあいい。

その時チャイムが鳴った。

授業中は安心するなんて俺おかしいな。

放課後、雨が降ってた。

いつも一緒に帰ってるレオは用事。

1人で帰ることにした。

玄関まで来ると、結構降ってるみたいだ。

「傘ない・・・」

まあいいか、走れば大丈夫だろ。

「瑛斗くん？」

ん？

「ああ、山本さん」

隣のクラスの人だ。

初めて話すかも。

「・・・傘もつてないの？」

「え、あー、まあ」

彼女の口の端が上がった気がした。

「途中まで一緒に帰る？近いよね？家」

「え、知らないけど・・・」

強引に腕を引つ張られた。

「うあっ」

「夢みたい・・・」

「何が？」

俺の質問はシカトされた。

傘があるため、顔が隠される。

周りは俺と彼女が一緒なのを気づかない。

ザー・・・

雨が強くなった。

「ねえ」

「はい」

「今日の子、彼女？」

「え？」

「ほら、ピンクの・・・」

ママのことか？

「いや、違う」

「ふうん・・・」

山本さん大人っぽいな。

こんな人だっけ？

雨で視界が悪くなる。

「ねえ」

「はい」

「私のことどう思う？」

んー・・・

「普通かな」

「私は好きだよ」

「そーなん・・・え？」

すると腕を絡ませてきた。

ヒー！

いくらひと気がない所だからって・・・

これは付き合ってるみたいで嫌だ。

冷や汗がどつと出た。

「照れちゃって・・・可愛いね」

「いや、あの・・・」

突き飛ばして逃げたい。

しかし傘に入れられたからには・・・

あ、ちょっと待て。

方向は確実に俺の家だ。

「あー、えつと山本さん？」

「何？」

「俺の家知ってたんだ？」

「ふふ・・・」

「ふふ」って！

聞きました？！

赤鬼やママとは違う雰囲気戸惑う俺。

「・・・あ」

「どうしたの？」

「も、もうすぐ家・・・」

「うん」

「ここでもいいよ。傘、ありがとう」

すると腕に力が入れられた。

「瑛斗くん・・・私のこと嫌いじゃないんでしょう？」

うん、嫌いではない。

「山本さん、腕、痛い」

好きでもない。

「私の家、近いんだよ」

「・・・？そーなんだ」

「鈍感ね、来るでしょ？」

は？！

「いやいや、用もないのに」

とりあえず腕はなせ。

「私、瑛斗とならいいよ」

•
•
•

-
-
-
-
-
-
- ?

•
•
•
•
•
•
•
•
!
•
!

クスクス笑う女は悪魔以上に恐ろしい。

「はあ・・・はあ」

ぜえぜえと荒い息を整える。

あれから俺は強引に腕をほどき、

「大体、俺の家こつち方向じゃないよ」

という何とも苦しい言い訳をして走り去った。

家とは反対側に来てしまった・・・

今は雨宿り中。

花屋の前。良い香りが鼻をくすぐった。

そついや来週、母さんの誕生日だな。

「・・・なんか見てみるか」

花屋のドアを開けた。

チリンと鈴が鳴る。

すべての始まりの音。

雨宿りとバラ。

高校生の男が1人で花屋なんて・・・

最初はそう思ったが、入ってみると平気だった。

キレイにレイアウトされた店内。

花の良さを更に生かしてと思った。

「・・・キレイだな」

真っ赤なバラが目についた。

花のことはよく知らないけど、バラぐらいは知ってる。

「バラ、好きなんですか？」

声がした方を見ると店員さんらしき人。

「あ、いやあの・・・キレイだなんて」

最近、女の人に話しかけられると焦るな・・・

店員さんは、ニコツと笑った。

なんだか心臓らへんがギュツてなった。

「・・・あ、ちょっと待っててください」

店員さんはスタッフルームに入っていった。

なんだ・・・？

戻ってきた店員さんの手にはタオル。

「外、雨すごいですね、これ使ってください」

「あ・・・ありがとうございます」

俺の制服が濡れてるのに気づいたらしい。

「いえいえ、ついでに花も見てくださいね」

え？

「あの、花を見に来たんですけど」

まあ、ついでだけとさ・・・

なんかただ雨宿りに来たと思われるのが嫌だった。

店員さんは焦った。

それはもう顔面蒼白。

「す、すみません！」

そんなに焦らなくても大丈夫だけどなあ。

「やっぱり僕みたいなのって珍しいですよね？」

「あ、はい・・・高校生の男の子はあまり」

なんか恥ずかしくなった。

「あ、本当は雨宿りしてただけなんですけど、

母の誕生日が近いので入ってみたんです」

なぜかバラす俺。

「そうなんですか、優しいんですね」

店員さんの安心した様子と笑顔にまた胸が苦しくなった。

それからしばらく花の話を聞いたりした。

雨はすっかりやんでいた。

「あの、タオル洗って返します」

「え、いいです！わざわざそんな！」

「いえ、あの・・・また来る予定なんで」

「いや、でも・・・」

「あ、洗わせてください」

なんだ俺。

「あ、えっと・・・じゃあお願いしますね」

負けたり、という感じの店員さん。

八重歯が可愛い。

ドアのほうに歩きながら彼女は言った。

「いつでも雨宿りしちゃってくださいね」

「いや・・・雨宿りだけは・・・」

普通迷惑じゃないか？

「いいんです。ここを選んでくれただけで嬉しいですよ」

この人、良い人だ。

なんか、わかる。

嫌味のない優しさ。

チリン

「ありがとうございました」

なんか俺、ドキドキしてる。

梅はうめえぞ。

「おいおい！まじかよ！」

目を丸くしたレオが大声を上げた。

「うるせーよ、バカ」

「いやいや！だってすごいじゃん！」

俺が女の話するのはそんなにすごいのか。

「良い人だったなって・・・そんだけだよ」

「お前が女を褒めるの初めてじゃん？」

「まったく、大げさなんだよ」

チツ、言わなきゃ良かったぜ・・・

でも言いたくて仕方がなかった。

――

「ねえ、瑛斗くんって何で彼女つくくんの？」

声の主は同じクラスの女子だ。

「何で」って何だよ。

「・・・何でだろうな」

「えー、何それえ、好きな子いないの？」

好きな子・・・

・・・！

俺は固まった。

頭の中にあの人が浮かんだから。

花の話を楽しそうにするあの店員さんが。

笑った顔が胸を締め付ける。

・・・？

「ねー、どーなの？いるの？」

女の声で我にかえった。

「・・・い、ない」

「あやしー！」

キャハハッと笑って女はどこかへ行った。

心臓が、はい。

|

お昼。

「んー・・・」

俺は考えていた。

片手に梅おにぎりを持って考えていた。

「瑛斗ー？さっきからどうした？」

レオの声も耳に入らない。

「きゃー、見て。王子が梅おにぎり食べてる！」

「どこどこ？あ、ホントだぁー！」

「ちょー可愛いんだけど！」

女子の声はもっと聞こえない。

「おにぎり食ってるだけで騒がれんなよ（笑）」

レオは俺の頬をペシッと叩いた。

「・・・あ、またボーっとしてた」

なんか俺、変だな。

「んー？具合悪いのか？」

「いや・・・それはない、はず」

レオは黙って俺を見た。

すんごい見た。

「・・・何だよ」

我慢出来ずに聞く。

「・・・ははっ、いや、何でも」

なぜ笑う？

「面白えなー・・・お前」

「・・・は？」

「あー・・・どうだろ？いや、合ってるはず」

ぶつぶつ言ってるレオはほっとして、おにぎりを食べた。

あー、梅うめえ。

バレバレ。

数日経った。

寝る前にあの店員さんが頭に浮かぶ。

いや、暇さえあれば浮かぶ。

そのたびに心臓がギュツとなる。

んー、心臓っていつか・・・

もう少し奥？

わからん。

無理に寝ようとする余計に寝れない。

|

痛い。

苦しい。

「瑛ちゃん、はやく起きなさい！」

「瑛ちゃん言うな」

なんて言う元気もない。

寝不足が続いている。

「ほら、はやく食べなさい」

ねみいー・・・

だらだらとイスに座る。

紅茶が入ったマグカップに手をのばす。

のばされた手のすぐ隣には小さな花瓶があった。

・・・？

視界にすべてを映し出す。

いつもはないはずのものが、そこにはあった。

「花・・・」

向かいの席に座っていた母さんは、俺を見て微笑んだ。

「あら、気づいてくれたのね。たまには花でも飾ろうかと思って。少し家から遠いんだけど、良い感じの花屋さんがあるのよー」

・
・
・
。

俺は部屋に戻り、ある物を取って母さんに見せた。

「もしかしてこの花屋?！」

あ、のとき渡されたタオル。

店の名前が刺繍されている。

「え、そうだけど・・・なんでそんな物？」

あ、やべえ。

「いや、これはその・・・べ、別に・・・」

「別について何よ、その店に行ったの？」

「まあ、ぼちぼち・・・あ、いや・・・」

よくわからない、といった表情をされた。

少し笑われたが、深くは追求してこなかった。

「・・・なあ」

「ん？」

レオは雑誌から俺へ視線を移した。

「・・・笑うなよ?」

俺の言葉に何かを感じ取ったのか、雑誌をとじた。

「えつと・・・前に話した人いるじゃん」

「んーと、花屋の?」

「そう、その人・・・」

少し間があった。

「好きかも。」

搾り出すような声で俺は言った。

するとレオは目を見開いた。

そして、待ってましたと言わんばかりに手を握ってきた。

「
だろ？！やっぱそう思ったんだよ！」

おい。

声がでかい。

そしてこの図は怪しまれるぞ。

俺は手を払いのけた。

「つか、思ってたのかよ」

「だってお前、あの話してから考え事してたじゃん」

思ってたけど言わなかったのは、自分で気づいてほしかったからだ。

「でもまだわかんねえよ？」

「へ？」

「考えると心臓痛くなってドキドキするだけだし」

俺の言葉にレオは爆笑した。

「はっはっはっ、お前っ……昭和初期かよ（笑）」

「なっ・・・?!」

古いつて「とか?」!

そんなことより!

「わ、笑うなって言っただろ!」

「うんって言っていないもん」

くそっ

しばらく睨んでやった。

レオは呼吸を整えて俺を真っ直ぐ見て言った。

「それって好きってことだぜ」

怒りは消えた。

プレゼント選び

また何日か経った。

今日は母さんの誕生日だ。

俺はカバンの中を確認した。

タオルはしっかり入っている。

「瑛斗、はやく行くぞ」

問題なのはこいつだ。

「……着いてくんなよ」

先に行くレオは止まった。

「いいじゃん、俺も見たいし」

「ったく・・・」

「それにお前が心配だしー」

「・・・うそつけ」

来てしまったぜ・・・

「何ボーっとしてんだよ」

背中をど突かれた。

「うるさい！・・・は、入るぞ」

「いらっしゃいますー」

チリン

この声。

あの人だ。

奥のほうで何やら作業をしている。

「瑛斗？あの人か？」

「あの人・・・」

見すぎたのだろうか。

目が合ってしまった。

どうしていいかわからなくなった。

「・・・瑛斗、これ返すんだろ？」

見かねたレオが腕を引っ張った。

手にはあの時のタオル。

「そうだった・・・そうだな」

自分に言い聞かせて彼女に近づいた。

「あのー・・・」

俺の声に店員さんは、もう一度俺を見た。

「はい、あの時のお客様ですよね」

久しぶりに見た笑顔。

やっぱり苦しくなる。

「これ、返しますね」

「あつ、すみません、ありがとうございます」

タオルを渡して、本題に入る。

「あ、えっと、前にも話したと思うんですけど」

「？」

「今日は母の誕生日で・・・」

パアツと更に明るい表情になる店員さん。

「そうでしたね、おめでとつございます」

久しぶりに女の人の素直な笑顔を見たのかもしれない。

作り笑いじゃないことを信じたい。

「お母様の好きな花とか知ってますか？」

好きな花・・・

なんだっけ？

「あ、前にここに来たことあったみたいで・・・」

「そうなんですか？」

「はい、それでオレンジの花が家にありました」

そっぴや母さん、オレンジ好きだよな。

「そっぴだ、少しお待ちください」

そっぴって、奥の方へ走っていった。

チラッと後ろを見ると、奴がニヤニヤしていた。

「・・・ニヤニヤすんな」

ロパクだに通じたみたいだ。

「お待たせしました。今日の誕生花はバラですよ」

「誕生花・・・？」

「はい、それにオレンジです」

その手があったな。

しかも都合が良い。

「じゃあ、その花と他の花で花束っぽいの下さい」

「こんな感じで、いかがですか？」

アバウトに伝えたが、出来が良すぎる。

「いい感じですよ」

ニコニコ顔がここまで似合う人はいるだろうか。

「おいおいおいおい！」

—

「ありがとうございました」

チリン

店を出で数秒後、レオは叫んだ。

「・・・なんだよ」

「普通に可愛いじゃん！」

「・・・前にも言っただろ」

それにしても目立つ。

花束持つ男子校生。

しかも隣も男・・・

「いやー、お前さ、可愛い子もフツてたからー」

レオはお構いなしに話を続ける。

「正直、不安だったんだよなー、お前の趣味」

「・・・失礼な奴」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6547f/>

恋する王子様。

2010年10月28日08時21分発行